東洋学報　第七十八巻第四号　平成九年三月

論説

一八〜一九世紀はじめの日本における オランダ語学力の向上とロシア問題

永積　洋子

はじめに

本稿は一七三九年（元文四）のスパンベルグ指揮のロシアの探検船の出現から、一八〇五年（文化二）にロシアの使節レザノフの通商要求を拒絶するまでの約六〇年間に、ロシアとの間に起こったさまざまな事件にさいし、オラ

ンダ商館がどのようにかかわったかを検討することを第一の目的とする。幕府は事ある毎に、オランダ商館長に問い合わせ、証拠となる品物を見せ、翻訳を依頼し、更なる情報を求めた。外国人のもたらす情報は風説書に限らないのである。

この時期には江戸でも蘭学が盛んとなり、オランダ語の学力が、飛躍的に向上した時代である。ティチング、ドゥーフ、メイランなど、この時代の教養ある商館長たちが絶賛を惜しまなかった、中央の文化人たちの知的好奇心、たゆみない努力によって、一八世紀末には通詞だけでなく、江戸の蘭学者たちも、オランダの書物を読みこなし、間違いが多いけれども、意思の疎通に事欠かないオランダ語が書けるようになった。また世界地理について、国際情勢について、老中も十分な知識を持つようになっていた。その一つの契機が、ロシアの接近にあったことを明らかにするのが、第二の目的である。

この時代の外交、洋学、書誌学、地理学などについては、諸先学の多くの業績があり、また史料集も数多く刊行されている。これらに導かれつつ、この時期の対外関係を新しい視角で見直したい。

一、ロシア船の出没と世界地理への関心の喚起

ロシアの太平洋探検の計画はピョートル大帝（在位一六八二～一七二五）の晩年にはじまるが、日本にその探検船が現れたのは一七三九年（元文四）のことである。その前年スパンベルグの指揮する三艘の船は、オホーツクを出帆、千島列島に沿って南下した。ボルシャヤ河口で越冬した後、この船隊は南下をつづけ、その中の一艘は一七三

九年五月に安房の天津村沖に碇泊し、八人の乗組員が水を求めて上陸、また別の一艘は（旧暦）十五月二十六日に奥州牝鹿郡田代島沖に碇泊し、日本人とかなり自由に交歓した。ロシア船は日本の漁船に煙草、銀貨を贈り、田代島駐在の藩の役人、村名主、寺の住持龍門は船上で歓待された。この知らせを江戸で受けた藩主の伊達重宗は、直ちに月番老中本多忠良に届け、また用人を在江戸の長崎奉行萩原伯耆守美雅の屋敷に派遣し、この事実を報告し、漁民が異国人から得たものをすべて差し出した。(1)

これらの品物は、七月二六日（旧暦六月二二日）に長崎に届いた。この日通詞仲間は長崎のオランダ商館長フィッセルを訪ね、御用掛兼通詞目付の名村五兵衛はふるえながら、銀貨二枚とトランプのクラブの九を見せ、四、五艘の異国船が日本の北方の沿岸で見えたと語った。通詞がこれらの人々はどこから来たと思うか尋ねると、商館長は新任の商館長、次席と相談し、彼らはモスコヴィアの人と思うと答えた。また船員の一人は、この銀貨はコパイカ（ロシアの銀貨）だと答えた。

翌日通詞五兵衛は再び出島に来て、将軍徳川吉宗の命令で十ケ条の質問をし、商館長は次のように答えた。

問一。モスコヴィとその属国の大きさはどれくらいか。答。長さ一三五〇マイル、幅五五〇マイル。

問二。モスコヴィとバタヴィアの海上の距離は。答。四二〇〇マイル。

問三。モスコヴィとバタヴィアの直線距離は。九三〇マイル。

問四。モスコヴィと日本の距離は。答。二七〇マイル。

問五。モスコヴィはどの方角にあるのか。答。北北西。

問六。モスコヴィの船はどのような構造か。答。オランダ船と同様である。

問七。モスコヴィア人はどの国と貿易をしているのか。どの国がモスコヴィで取引をしているのか。答。彼ら自身の貿易は非常に限られている。オランダ人、イギリス人、ハンブルグその他の商人がモスコヴィで商業を営んでいる。

問八。モスコヴィア人はどのような様子か。彼らはどのような服装をしているか。答。彼らは強健で、長い着物を着て高い帽子をかぶっている。

問九。モスコヴィア人はオランダ語、英語、フランス語、ポルトガル語を話すか。答。彼らには独自の言語があり、それは他の西欧の言語とは非常に異なる。

問一〇。モスコヴィには教会があるか。教会には彫像があるか。彼らは法王に服従しているのか。答。彼らの教会にはギリシャ正教の彫像がある。ここには独自の教会の頭がいる。

商館長の回答は詳細に書き留められ、もし商館長が事実を語っていないなら、破滅的な結果を招くだろうと警告された。(2)

これらのモスコヴィあるいはロシアに関する将軍の命令にもとづく質問は、二つに分類できる。一つは第一問から第五問までの地理に関するもの、もう一つは、今後のロシア船の来航に備えるための第六問から第一〇問までで、ロシア船、ロシア人の見分け方、ロシアの言語、宗教などにわたっている。一六七三年（延宝元）イギリス船リターン号が貿易再開を求めて来航したとき、オランダ人がかねてから風説書で知らせていたイギリス国王のポルトガル

との王女と結婚が事実であることを確かめ、これを理由にその要求を断った先例があるので[3]、ロシアの場合もあらかじめ調査したと思われる。

地理についての質問は、ロシアの国土の大きさ、ロシアからバタヴィア、ロシアから日本までの距離、日本から見たロシアの位置についてである。西川如見の『増補華夷通商考』一七〇八年（宝永五）刊は、江戸時代の最初の世界地理書として広く認められている。この書物が明末に中国にいたイタリアの宣教師艾儒略の『職方外紀』により増補されたことは周知の事実であるが、それは更に通詞たちがオランダ人から得た知識によって補われたとされている[4]。通詞たちが、オランダ人に長崎から世界の各地までの距離を質問した例は、管見の限りでも一六五八年に見られる[5]。さらに長崎オランダ商館の日記の一六八四年六月一二日の条には、大通詞加福吉左衛門がオランダが通商している国とその国の日本からの距離を記した彼らの古くからの覚書の小冊子を持ってきたとあるので[6]、地理学の基本的な知識を得るため、このような質問がくりかえし行われていたことは間違いない。新たにロシア船が来航した時、まず地理についての調査が行われたのは当然と言えよう。

スパンベルグの船隊が、日本と韃靼方面に派遣されたことは、オランダ本国から知らせて来たとして、翌々一七四一年（寛保元）の風説書で漸く伝達されたが、本国からくわしい知らせがないため、船隊派遣の目的は不明であると記されている[7]。

二、「ゼオガラヒー」の注文とオランダ語学力のめざましい進歩

江戸時代に「ゼオガラヒー」といえば地理学という一般的な意味ではなく、ヒュブネルの著書を指すことに決まっていた。ヨハン・ヒュブネル（一六六八―一七三一）はライプチヒ大学で神学、地理学、史学を学んだが、二六歳で著した処女作 *Kurtz Fragen aus der neuen und alten Geographie bis auf gegenwärtige Zeit.*『古今地理学問答』（一六九三年刊）は三六版を重ね、発行部数は数十万を越えたと言われている。この本は新しい理論を打ち立てたのではなく、啓蒙時代にふさわしく、問答形式で国土の位置、面積、住民、風俗、山河、湖沼、産物などをわかりやすく記したものである。そしてヨーロッパでは、「ゼオガラヒー」を読んだのは、学校生徒、商人、家庭婦人であり、英、仏、伊、露、瑞、蘭語などの訳本があいついで出版された。[8] 言い換えれば、本書は難解な学術書ではなく、一般向きのわかりやすい、読みやすい本だったのである。この本のオランダ語訳を、[9] オランダ人は自分で読むために、長崎に持ち込んだに違いない。

ヒュブネルの本が通詞仲間の注文書に最初に現れるのは、管見の限り、一七六三年のことである。この年には Hübners Geographie, Beschrjving van de geheele wereld in groot quarts. が二冊注文され、「この中の一冊が渡された」と後から追記されている。[10] このタイトルは、岩崎克己、石山洋の厳密な書誌学的考察の論文に見えないので、何種類もある蘭訳本の中でどの版なのか確認できない。また一七六三年の積荷目録には、「通詞仲間のために小売店から買い入れた物」としてヒュブネルが二冊記され、翌年の積荷目録にも通詞仲間用に同じ本が一冊見ら

れる。[11] この両年ともヒュブネルの地理書と簡単に記されるだけで、どの版なのか不明である。ともかく、この本はバタヴィアの書店でたやすく手にはいるほど、広く読まれていたことは確かである。一七六五年の通詞仲間の注文書に、はじめて Kort begryp der oude en nieuwe geographie van Johan Hubner と、くわしいタイトルが記される。これは現在国立国会図書館に架蔵される通詞西善三郎の自署本と同じものである。[12]

注文書は一七二九年ころからほとんど毎年のこっていること、注文による舶載書籍のタイトルまで積荷目録にくわしく記すことは、むしろ例外であることを考え合わせると、ここにあげたいくつかの史料から、一七六〇年代にヒュブネルが集中的に輸入されたと言えるだろう。

これらの本は、この時期には長崎のオランダ通詞の手元におかれたと思われる。先にあげた西善三郎は一七七八年に没しているので、善三郎は少なくともこのときまでゼオガラヒーを持っていたと考えられる。またこの本の最初の翻訳者は本木良永であった。良永は当時通詞の中でもっともオランダ語に秀でており、志筑忠雄や大槻玄澤もその教えを受けている。この良永が一七八七年（天明七）に翻訳を完成した「和蘭地図略説」は、もちろん全訳ではなく、この中の地図用法の章の抄訳であり、地誌の章ではない。[13]

長崎のオランダ通詞たちは、日常のオランダ人との接触により、オランダ語の能力を磨いていったと思われる。やさしく書かれた地理書について、質問に答え、説明してくれる教師として、オランダからはるばる極東まで航海してきたオランダ人ほど、適当な人はいなかっただろう。ヒュブネルの地理書は、蘭学の勃興と共にオランダ語の読み書きを真剣にまなびはじめた通詞仲間に、絶好のテキストとなったと思われる。

西善三郎はまた、マーリンの蘭仏辞書の翻訳を試みたが、業なかばで死去した。[14] 通詞仲間のマーリンの蘭仏・仏蘭辞書の注文は一七五五年にはじまり、一七五八年の注文には、八冊本四部と明記されている。一七六三年にはマーリンの蘭独辞典も注文されたらしく、積荷目録に「マーリンの蘭独辞典というものがあるにはちがいないが、手に入らなかった」と注記されている。[15] 蘭仏辞書はどこの書店でも買えたが、蘭独辞書はバタヴィアでは需要がないため店頭になかったのであろう。

この蘭仏辞書は、一八世紀にはフランス語学習のためではなく、オランダ語の辞書として使われた。大槻玄澤の「蘭学階梯」には、この辞書の〔オランダ語の〕註釈は中国の辞書と同じで、すでにおぼえた言葉の同義語でくわしく註釈してある、と記されている。[16] 通詞仲間がこの辞書を使いこなせるようになると、オランダ語の読解力が飛躍的に進歩したと思われる。

一七八四年、オランダ東インド会社の本国の一七人会は「オランダ人が日本に到着すると、日本人は書物で得た知識およびヨーロッパの出来事について、更なる情報を得たいと待ちかまえている由であるが、オランダ語の知識は通詞の間に限られているのか、オランダ語の使用が日本でどのような状況にあるのか、回答してほしい。」とバタヴィアの東インド総督に照会してきた。この手紙の写しが長崎に届いたのは一七八六年のことである。当時の商館長ファン・レーデ・トット・パルケレールは、この抜粋の欄外の余白にその回答を記しているが、その大意は次のようである。「オランダ語の知識を持つ者は主として通詞に限られているけれども、もっとも卓越した人々もその中に含まれる。彼らはオランダ語の習得にすべての情熱を傾けたのである。商館長ティチングは一七八二～三年

の貿易閑散期を利用して、長崎奉行久世丹後守の黙認の下に毎月江戸に手紙を送り、彼が情報を得たいと思うことを質問した。この回答は開封せずに彼に手渡された。この回答〔のオランダ語〕は不完全ではあったが、その目的を達するのに十分であった。彼はオランダ語の間違いを訂正し、次の便で送りかえしたので、この文通は相互にとって有益につづけられた。[17]」この時期のティチングと日本人の文通は残念ながら残っていないが、寛政元年（一七八九）に丹波福知山の藩主朽木昌綱からベンガル・チンスラの商館長ティチングに宛てた手紙の付録には、日本人の起源、中国と日本の関係、漢字、前将軍の没年などについてのティチングの質問と、昌綱の回答が記されている。更に追伸には「この手紙を訂正して送り返していただければ深謝いたします。[18]」と丁重に記されていて、蘭学者の大名として著名な昌綱が、なおオランダ語の上達に情熱を傾け、相互に有益な文通が続いていたことがわかる。

このような江戸のすぐれた学者たちのオランダ語の急速な進歩の背景には、田沼時代から江戸に参府するオランダ人を、宿舎長崎屋に訪問することが寛大に許可されるようになったことがある。将軍の奥医師の桂川甫三国訓、その子の甫周国瑞、前野良澤、杉田玄白、青木昆陽、平賀源内などがオランダ人と面談した主要な人物である。[19]またティチングが二度江戸に参府したとき、朽木昌綱は毎日訪ねて来て、夜一二時まで帰らなかったという。[20]

ヒュブネルの地理書とマーリンの蘭仏辞書の輸入にはじまるオランダ語の本格的な読み書きの学習は、長崎の通詞仲間からたちまち江戸の蘭学者にひろまり、短期間のあいだに、両者の差はほとんどなくなったと思われる。もちろん日本人の書くオランダ語は、ティチングが後任の商館長シャッセ宛の私信には「日本人の間違いだらけの翻訳に怖じ気づかないように[21]」と遠慮なく書いている程度のものではあったが。

三、ロシア問題の展開

一八世紀後半のロシアとの関係で、よく知られているのは、一七七一年（明和八）にハンガリーの冒険家ベニョフスキーが、日本の近海を航行し、オランダ商館長に手紙を送った事件である。[22]

ベニョフスキーがドイツ語で書いた六通の手紙は、たいへん難解なため、この翻訳をたのまれたオランダ商館長は、商館勤務のドイツ人助手、ベックシュタインに翻訳させた。この中で、奄美大島から送った最後の書簡は、今年カムチャッカから出帆した三艘の船が日本沿岸を巡航し、松前とその周辺の島を来年以降攻撃する計画についての、見通しをすべて収集したこと、千島列島に要塞が建設され、弾薬、大砲、倉庫も整備されていることを、報じている。この翻訳に、商館長は長崎奉行宛の書簡を添えたが、ここに署名しているベンゴロ（ベニョフスキー）はオランダ人にとって全くの異邦人であるため、この内容が必ずしも事実であるとは言えない、と記している。[23]このとき新旧商館長のダニエル・アルメナウルトとアレント・ウィレム・フェイトは、ともにロシアについて全く無関心で、この書簡を日本人のロシアにたいする警戒心を引き起こすために利用しようとは、考えなかったらしい。

ベニョフスキーがこのような手紙を送った真意は不明であるが、この「警告」を当時長崎を訪れた日本の知識人たちは聞き流さなかった。一七七四年（安永三）平澤元愷は、通詞松村君紀からこの話を聞いて書き留めているし、三浦梅園も通詞吉雄耕牛の話から、蝦夷の北辺がすでに西洋にとられたことを知った。[24]

なかでも、この事件を機に、幕府の中枢にロシア問題の重要性を認識させた点で、工藤平助の『赤蝦夷風説考』

ほど大きな影響力を持った書物はなかったと思われる。仙台藩医の養子となった工藤は、かねてから蝦夷地の問題に興味を寄せ、松前藩士と交わり、同地の事情に精通していた。また前野良澤と親交があり、大槻玄澤とは親類のちぎりを結んでいた。さらに桂川甫周、中川淳庵とも親しかった。『赤蝦夷風説考』上下二巻の中、上巻はロシアの南下の実状を示してその対策を論じた部分であり、一七八三年（天明三）に記された。下巻は蘭書から得た知識にもとづき、ロシアとカムチャッカの歴史と現状を記したもので、一七八一年（天明元）に執筆された。ロシアについて記すにあたって、工藤が利用したのは、先にあげたゼオガラヒーのほか、ベシケレイヒング・ハン・リュスランド Beschrijving van Rusland（ロシア誌）である。一七四四年にユトレヒトで刊行された本書の四巻二冊本は、一巻がロシアの地誌、二巻以下はロシアの歴史と現状を述べたものである。この本は、はじめ通詞吉雄幸作が所持し、一七八一年にオランダ人参府に幸作が随行したとき、朽木昌綱がこれを彼から買い上げて前野良澤に下賜したといわれる。工藤自身はオランダ語を読まなかったから、幸作からベシケレイヒングの抄訳を手に入れたようである。工藤は下巻でロシアの東方経略の歴史をのべ、ロシアとカムチャッカ・千島・蝦夷地の関係を的確に記している。これにつづいてロシアの歴史を概観し、その国土の膨張に及び、スパンベルグにより日本の探検が行われたことも述べている。そしてその結びに、「この如きの記事を見れば、破竹の勢とみゆ、おそろし」と割注を付している。後から書かれた上巻には、ベニョフスキーの情報がとりあげられ、これは日本貿易の独占がロシアによって犯されることを恐れたオランダの陰謀と思われると記している。本書は一七八三年に老中田沼意次に献上された。また本書の写本の一つ『加模西葛杜加記』はかつて松平定信が所蔵したものであるが、この本の上巻と下巻の間に蝦

夷地の地図とロシア全域をふくむユーラシア大陸の地図がついていたことがわかっている。[25] 老中田沼意次と松平定信が、ともにこの写本を手にし、その時代のもっとも正確なロシア情報を得たことは、その後の蝦夷地政策に大きな影響を及ぼしたにちがいない。

幕府の蝦夷地調査は、一七八五年（天明五）にはじまる。この年派遣された普請役などは、松前から東西二隊に分かれ、一隊は蝦夷地に向かい、国後島まで到達した。西蝦夷地に向かった一隊は、宗谷から樺太島、タントマリまで到達した。翌年には最上徳内らが主として千島と樺太を探検した。この二度の探検によって、蝦夷地の地理と現状がはじめて詳細に明らかになり、特にロシアの千島侵略の事実を確認することができた。この調査にもとづき、山口玄六郎は『蝦夷拾遺』（一七八六年完成）、最上徳内は『蝦夷草紙』（一七九一年完成）を著し、蝦夷本島と千島に関する地理・風俗・産業・ロシア船渡来のことなどを記している。[26]

一方オランダも、ロシアのカムチャッカ進出について、かねてから風説書により、幕府に知らせていた。一七六五年（明和二）には、「カムシカッテカ国よりムスカウヒヤ国の内、シベリヤ之地に数万之軍兵を差越、専及合戦候段申越候」と報じ、その後二年の風説書につづけて、この騒乱はなお静まらないと記しているが、[27] この情報がその当時注目されなかったのは、通詞がロシアの地図を持たず、カムシカッテカ、ムスカウヒヤ、シベリヤの相互関係がわからなかったためであろう。しかし、一七七二年（安永元）の風説書は、ベニョフスキーについて、バタヴィアで得た情報として、ポーランドで捕虜になり、シベリアに送られたが、カムチャッカに逃げ、ここで船を盗んで逃げた者で、昨年はマカオに到着、そこからルソンへ渡り、ここでフランス船に便乗してフランスに向かったと正

確に翻訳されている。[28]

またロシアが黒海への出口を求めて戦った第一次ロシア・トルコ戦争（一七六八―一七七四）、第二次ロシア・トルコ戦争（一七八七―一七九一）も、その度に風説書に記されているが、ただ「合戦に及び候」では、何のための戦争か、少しもわからなかった。それでも一七九二年（寛政四）一月六日には長崎奉行はオランダ商館にゼオガラヒーを求め、それを得ているし、また同年四月二七日には、将軍のために通詞がヒュブネルのコウランテントルコ（時事解説辞典）を求めたが、商館長はこれをもっていなかった。[29] 世界地理について、時事問題について、江戸でも長崎でもますます関心が高まっていた様子が窺われる。

一七九二年六月一二日には、通詞が一七八八年 Koks と署名のある八枚のロシア語の紙を持ってきた。これは勘定方と普請方の二人が蝦夷と千島に派遣され、同地にロシア人とカムチャッカ人の兵士が来たのは事実かどうか調査したとき、持ちかえったものであった。しかし、商館にはロシア語を話せる人はいても、読める人はいなかったので、これを断らなければならなかった。通詞はまた将軍のために外来語辞典を求めたが、これも丁重に断った。[30]

一七九二年（寛政四）、ロシアの使節ラクスマンは、伊勢の漂流民大黒屋光太夫らを乗せて根室に来航し、通商を求めた。オランダは、このロシア使節の派遣について全く情報を得ておらず、この使節について何も事前に報ずることはできなかった。老中松平定信は松前藩主松前章廣からこの報告を受けると、交渉のため蝦夷地に役人を派遣した。

定信は使節ラクスマンへの対応の基本を、礼と国法に置くこととした。ロシアは世界に比類のない強大国で、し

かも正当な理由のない戦争はしない国だと外国の本に書いてあること、今回の来日は漂流民送還という名分があることがその理由だった。そこで国法として「かねてから通信（国交関係）のない外国船が日本に来るときは、これを捕らえるか、海上で打ち払うことが古来の国法である」と回答した。これにつづけて、外交交渉の地は長崎であるから、江戸に来ることは認められない、だから長崎にまわり、そこで通商要求をすべきである、ただ不意に長崎に来ても入港できないので、信牌（入港許可証）を与える、とつけ加えた。[31] ロシア使節に冷静に対応し、穏便に帰国させることに成功したのは、定信がロシアは強大な国であると十分に認識していたためである。

この時帰国した漂流民大黒屋光太夫の一〇年間のロシアの見聞を、桂川甫周が聞き取り、その内容を整理し、ゼオガラヒーを参考にして編述したのが『北槎聞略』である。ここには付録として、ロシア製と見られる一〇枚の地図と、絵巻物一巻も添えられていた。[32] 本書が完成したのは、一七九四年（寛政六）であるが、甫周はその前年にゼオガラヒーのロシア関係記事の翻訳『魯西亜志』を完成している。これらの書物が、ロシアについての理解を一層深めたことは疑いない。

松前に異国船が到着したので、調査のため委員が派遣されたという情報が、出島に届いたのは、一七九三年二月二日のことで、ロシア船の入港から四ヵ月半経っていた。この知らせをもたらした通詞は、これはロシア人であることは確かだが、彼らが取引をする許可が得られるか、また彼らの贈り物を幕府が受け取るかどうかは、非常に疑わしいと語った。そして、奉行のためにロシアの地図とベシケレイヒング・ハン・リュスランド（ロシア誌）を求めた。商館長はどちらも持っていなかったので、必要と思われる限りの説明をした。四月二九日には、通詞が幕府

のために独蘭辞書を求めて来たが、これは商館になかった。商館長は、ロシア船からドイツ語の文書を受け取ったにちがいないと考え、翻訳しなければならない文書があるなら、いつでも奉仕したいと申し出た。八月一五日には、老中松平定信に気に入られている勘定方が、思いがけなく出島を訪問したが、商館長ヘンミーはロシア問題では会社は日本の信頼される同盟者として行動するつもりだと、保証している。[33]

一七九四年（寛政六）には商館長ヘンミーが江戸に参府した。五月二七日、将軍に拝謁するため城内の広間に来ると、水戸の老藩主徳川治保が親しく声をかけ、「ヨーロッパを出たのは何時か。」「東インドにはどれくらい滞在したのか。」「ここでは退屈ではないか。」と尋ねた。ヘンミーは近くに立っている治保にたいし、その前に平伏している通詞に答えさせた。「私は東インドで二〇年を過ごした。貿易の衰退している時に、将軍に拝謁するのは残念に思う。」さらにヘンミーが将軍のところでオランダ人のためにとりなしを頼むと、治保は「よろしい」と答えた。これはかつてなかったことで、ヘンミーは水戸の藩主は他の大名とは話をしない、彼の言葉はあまりにも神聖で、ただ将軍の耳にだけ届くと書いている。それだけではなかった。控えの間では薩摩の若い大名島津斉宣が特別に挨拶し、検使は将軍の御座所の間など城内を見学する許可を与えた。将軍の世嗣の住む西の丸でも、検使は一二〇以上の部屋を案内した。[34] 徳川治保は、学問を好み、ロシアなど対外問題への関心が強かったことで知られている。ロシア問題が次第に緊迫するとともに、商館長の江戸での処遇も変わってきたのだろう。

この年は三月から四月にかけて、長崎では高鉾島を標的として、東南の海岸で三回大砲の射撃訓練が行われ、オランダ商館長も見学した。これはロシア船の来航が予想されるので、その時敵意を示すためである、と噂されてい

た。[35]

近藤重蔵は、一七九三年（寛政七）に長崎奉行手附出役として長崎に出張したとき、オランダ船長にロシアについて尋ねたところ、彼は若いときロシアに行ったことがあるが、同地は繁栄しており、日本のことなどもくわしく知っていて、もっとも恐るべき国であると聞いた、と記している。重蔵が林大学頭を通じて幕府に提出した海防策建言書の草案には、ベニョフスキーの書簡を引用し、その警告は疑うべきではないが、最近「賢主女帝〔エカテリーナ二世〕死去之上、都児格（とるこ）と戦争もこれある由」と、この年のオランダ風説書の記事を引用して、数千里をへだてる蝦夷地まで急に攻めてくることはないだろうが、「リュスこそ我邦腹心之病と奉存候」と結んでいる。[36]

ベニョフスキーの警告から二〇年のあいだに、書物とオランダ人との対話、大黒屋光太夫の見聞を通じて、ロシアの地理、歴史、風俗、東方経略の過程が十分研究され、やがて信牌をもって長崎に来航すると予想されるロシア船にたいする準備は着々とととのっていた。

四、使節レザノフの来航

ロシア船ナデジュダ号が長崎に来航した一八〇四年一〇月九日から同船が出帆する翌年の四月一九日まで、当時の商館長ドゥーフは、通常の商館日記とは別に、秘密日記を記している。[37] この日記は、諸先学が利用されている『通航一覧』所収の諸史料とともに、レザノフの来航について最良の史料と思われるので、主としてこれによって、この事件とオランダとの関係を検討したい。

一八〇四年八月八日にオランダ船マリア・スザンナ号が入港したとき、ドゥーフは大通詞中山作三郎、石橋助左衛門と協議した。フランスと同盟しているオランダとイギリスの間に再び紛争が起こったこと、またロシア船が二艘世界一周の航海に出ているが、これには大使が乗っているので多分日本に来ると思われること、の二点を風説書に書くべきかどうかというのが、その議題だった。通詞たちは長い間話し合った後、まず蘭英戦争については何も記さないことを提案した。ドゥーフはこれについて噂が広まった場合を考えて躊躇したが、通詞たちは風説書に記さなければ、他の誰が何を言っても信憑性がないと見なされると請け合った。一方ロシア船については、将軍がかねてから日本に使節を派遣しようとする国があったら、直ちに知らせるように命令しているから、この情報は将軍によろこばれるに違いないので、オランダ人に利益となるだろうと提案した。これを受けて、この日の夜一〇時近くに通詞仲間全員が風説書を書き記すため出島に来た時、ロシア船来航のこととその他の通例の風説を知らせた。(38)

この風説書と、これにつづいて入港したヘジナ・アントワネット号の提出した風説書は、ともに『和蘭風説書集成』に収められているが、ここにはロシア船については何も記されていない。従ってこの一件だけは、別段風説書に仕立てられて江戸に送られたものと思われる。別段風説書は極秘文書だったから、その写しがどこにも残らなかったのであろう。

ロシア船の世界一周を知らせた総督シーベルフからドゥーフ宛の書簡には、「日本に関係のあるヨーロッパのニュースを知らせ、見解を述べることは、日本人にとって不快なことではないだろう。」という前書につづいて、使節の乗った二艘のロシア船が日本に開国を求めて近い中に来航することが簡潔に記され、一八〇三年九月六日付のハー

ルレム新聞 Haarlemsche Courant が添えられていた。ここには八月一一日付ペテルスブルグからの報道として、「八月一一日に皇帝の命令で世界一周を意図する二艘の船が、商工大臣ルミヤンツェフ、海軍大臣チチャゴフの視察を受け、クローンスタットから出帆した。この船は、ポーツマス、カナリー諸島、ブラジル、太平洋、サンドイッチ諸島、そして一八〇四年に日本、カムチャッカ、カントン、ジャワ、スマトラ、喜望峰を経てロシアに帰る。侍従レザノフはこの遠征隊の指揮官で、ロシアの使節として日本に行く」と記されている。最後にシーベルフは「その目的は日本人に開国を求めることである」と明記している。(39)

一〇月九日、いよいよレザノフの乗船ナデジュダ号が長崎港外に現れると、ドゥーフは検使、通詞とともにこの船の国籍と、来航の目的を調べることを委任された。ロシア船上で盛装で出迎えたレザノフに、ドゥーフは検使立ち会いの下でフランス語で尋問した。船の国籍のほかに、来航の目的が尋ねられたが、レザノフは、「ロシア皇帝の名で将軍に贈り物をし、同時に私が携帯している長崎に自由に来てもよいという許可証に感謝するために来航した」と答えた。通商を求めるために来航したのではないか、という質問には、当面はそうでないが、できれば通商が将来よい基礎の上に行えるかどうか知るため、と答えた。この尋問の間に、レザノフは日本人に気づかれないようにロシア駐劄オランダ大使、ディルク・ファン・ホーヘンドルプからドゥーフに宛てた書簡を渡し、またアジアの全植民地評議会を構成する、オランダ東インド会社の取締役から、東インド総督と評議会に宛てた開封の書簡と、ホーヘンドルプから各地の総督、司令官などに宛てた開封の紹介状を読み聞かせた。(40) ドゥーフはこれにより、この遠征は本国政府が予見し、熟知していることを知ったが、「できることであれば、閣下を援助するつもりだが、す

べては長崎奉行次第なので私が閣下と話す光栄を得られるのは、これが最初で最後の機会となる可能性も十分ある」と述べて、最初から積極的に援助できないという態度を明白にした。この後、ドゥーフはレザノフの奉行訪問、船の港内碇泊などの要求を通訳した。検使が最後に何か大使と個人的に話すことがあるかとドゥーフに尋ねると、ドゥーフはこれを断わり、できるだけ早く辞去したいと言った。

翌日、大使が持参した将軍宛の書簡の内容について質問するため、ドゥーフはふたたび船に行くことを求められた。すでに船の国籍、来航の目的はわかっているので、尋問は勘弁してほしい、特に船長と船医はかなりオランダ語を話すのだから、とドゥーフは一旦断わった。しかし、これが最後だからと通詞に説明され、結局この日も尋問に立ち会った。その質疑応答は、レザノフが通商条約を結ぶための全権を与えられていることを明らかにした他は、前日と大差なく、結局ロシア皇帝から将軍への書簡の内容を知ることは出来なかった。

ドゥーフは前述の三通の書簡について慎重に検討した結果、ロシア人のあれこれの要求に関わると、日本人はオランダ人がロシア人と友好的に通じ合い、文通をつづけて何か共謀するかのように考えかねないと判断した。しかし、ホーヘンドルプの回状形式の紹介状に従って、ロシア人の生活必需品と食料品の供給の依頼を取り次ぐことについては、出来る限り協力することにした。それと共に、商館の手持ちの砂糖、茶、煙草、出島で栽培しているキャベツ、パセリなどの野菜を送り、またロシアの使節と小さな贈り物を交換して友好関係を保つことに努めた。さらに一一月五日に出帆する二艘のオランダ船は、奉行の許可を得て、レザノフからロシア皇帝宛の正副二通の書簡を預かることになった。この書簡は二艘の船に別々に乗せ、バタヴィアからペテルスブルグのホーヘンドルプ大使気

付で送られることになっていた。このオランダ船が出帆するとき、ロシア船に挨拶しないよう、奉行から命令されたので、船長はロシア船の挨拶に答礼せず、船員が帽子を振っただけだった。この報告を船長から受けると、ドゥーフはただちにレザノフに手紙を書き、奉行の命令のため答礼できなかったと弁明した。また、レザノフが上陸を許され、海岸に近づいたときは、出島に旗を掲げて敬意を表した。このように、ドゥーフはオランダの友好国であるロシアにたいして表面上最大の礼儀をつくしたが、ロシアに通商が許されないよう、慎重な妨害工作が行われた。

ドゥーフは一〇月一五日に二人の長崎奉行、成瀬因幡守、肥田豊後守に次のような覚書を書いている。

約二〇〇年前に将軍から与えられた来航許可朱印状により、日本と通商する自由が与えられた。約一六〇年の間、我々はすべてのヨーロッパの国民を排除して、通商を行い、我々にたいして定められた法を常に守ってきた。日本人は昨年、当地で通商を要求した二艘の異国船を追い払うことで[41]、我々にたいする昔からの愛着をなおもっているあかしを示した。今到着したロシア船についても、我々が毎年読み聞かされる命令に従って風説書で知らせた。この大使は必ず通商を要求するに違いないので、次のことをお願いしたい。上述の我々が一六〇年間享受してきた特権を閣下は忘れていただきたくない。私が当地で五年間の滞在の間に日本国民の誠意について得た認識は、閣下がオランダ人が長い間保持してきた特権を縮小されることはないだろうと確信させる。

ドゥーフは、家康から得ている朱印状、ヨーロッパ諸国の中でオランダだけが貿易を許されている慣行、将軍の命令を常に守ってきたこと、一八〇三年の異国船の来航の際示されたオランダ人にたいする好意、ロシア船の来航の予告を列挙して、これまで享受していた特権が侵害されることがないよう、奉行に訴えたのである。ドゥーフは

この覚書をまず通詞に見せ、通詞はこれを奉行の秘書官に見せて、これを公式に提出したときに不都合がないかどうか様子をさぐらせた。秘書官は、ロシア船はまだ高鉾島の島かげにいて、湾内に来ることがはっきりするまで待つのがよいと考え、奉行もそれを強く勧めているとの返事をもたらした。ドゥーフは通詞たちに、ロシア人は将来通商を許されるかどうか、と尋ねると、通詞はそれは幕府次第だとしか答えなかった。しかし石橋助左衛門だけは一人のこって、奉行はオランダ人が、今年ロシア人が来るらしいと知らせたことに、非常な満足を示したこと、そしてすべてがその通りになったので、このことが幕府においてもオランダ人に悪い結果をもたらさないことは確かであると、秘書官が内々彼に語ったと知らせた。

ロシア船が港内の安全な場所に碇泊を認められたのは、一一月一〇日、そしてレザノフなどロシア人の一行が上陸を許されたのは一一月一八日で、船の到着から四〇日後のことである。一行のため準備された宿舎は、もと海鼠(いりこ)を入れていた倉庫で、しかも火を使うことを禁じたため、大使はひどい風邪をひき、ドゥーフは日本の上着を作るよう仲介した。宿舎のまわりは竹垣で囲われ、その脇の長さ一〇〇歩、幅二〇歩の塀で仕切られた空き地を、昼間ほんの少し歩くことが許されるだけだった。このような監禁生活の後、将軍の上使、目付遠山金四郎が江戸から幕府の命令をもって到着したのは、翌年の三月三〇日だった。その回答は、中国、朝鮮、琉球、紅毛（オランダ）は、そのいわれがあって長い間来航を認めているが、新規の外交関係は許さないと明言している。(42)

レザノフは将軍の命令、長崎奉行の命令、上使の目付の口上書はすべて日本語で書かれているので、そのオランダ語訳を求めた。通詞たちは奉行の命令でドゥーフを訪ね、彼らが作った訳文の点検を頼んだ。将軍の命令の意味

が変えられないように、またできるだけ多く日本語の文体を残すように注意しながら、通詞たちと協力してこれを直してもらいたい、というのがその希望だった。さらに、奉行はこの仕事は日本人がオランダ人においている信頼の証明となるもので、したがって奉行はドゥーフがこれを拒否しないことはもちろん、このことを秘密にしておくことを希望している、とつけ加えた。ドゥーフは、「理解できないいくつかの言葉を、通詞たちの承認を得て直した後、通詞たちが彼の手直しに完全に満足し、それが日本語の命令の正確な翻訳であるという証明を与える」という条件でこの仕事を引き受けた。午前二時まで約四時間かかって、ドゥーフはあまりにも間違っているので、通詞たちとつき合うことに慣れていない人には完全に理解できない命令書を手直しした。

その翌日夜一〇時に、前夜と同じ通詞たちが来て、彼らは昨夜手直しされた文書を慎重に検討し、これは命令の意味をよく表していると認めた。しかし奉行所に行くと、奉行はこの写しを四通作り、ロシア大使、奉行所、オランダ商館、上使目付に渡すことになると言った。目付が江戸に持っていく写しは、江戸で高官たちの命令で、幕府にいてオランダ語の少しわかる医者たちによってふたたび翻訳されるはずである。そこでこれがあまりにもオランダ語風の文体で書かれていたならば、この医者たちによってよく理解されないか、もしくは間違って翻訳されることもあり得る。そこで通詞たちは、ドゥーフにこれをもう少し日本語風にしながら、しかも同時に他のオランダ人にも理解できるようにすることを求めた。

翌日、通詞たちは清書された命令書を持ってきて、ドゥーフに点検を頼んだ。それが終わると、奉行の命令により、清書された命令書の写しと次のような証明書を渡した。

「下名の大小通詞は次のことを宣言する。ドゥーフは長崎奉行の真剣な要望により、ロシア大使レザノフに宛てた将軍と奉行の命令を明快にし、推敲するために我々を助けた。また目付が上記のロシア大使に行なった要求についても同様である。この商館長の行なった推敲に我々は完全に満足し、これは日本語で書かれた命令の内容と完全に一致している。[43]」

ドゥーフと通詞の間の長年の信頼関係が、幕府からロシア使節に与えた回答を正確に理解してもらうのに役だったことは確かである。ドゥーフも通詞も、この推敲にあたって極めて慎重で、それが江戸で桂川甫周などの医師にふたたび点検されても、訳文が日本語の命令書の真意を逸脱していないことが、十分理解される程度に、日本語の文体を残したオランダ語にするよう努めた。ロシア船が出帆した後、この年の八朔にドゥーフが長崎奉行肥田豊後守に拝謁したとき、命令書の翻訳を援助したことに大変満足していると、口答で賞賛された。この後、この命令書の訳文は商館のもっとも大事な文書として、家康、秀忠の朱印状と共に、商館で樟の箱に保管されることになった。[44]

レザノフが出帆するとき、ドゥーフにホーヘンドルプへの手紙をことづけることが許された。ここに彼は、出来る範囲で大使の滞在を少しでも快適にすることに努めたことを述べ、大使がその目的を果たさなかったことを簡単に記し、最後に「日本はロシア人を拒絶したので、我々以外の国を受け入れることがないことは確かだと結論できる。」と記した。[45] ドゥーフの外交的手腕は、見事なものだった。これらの行動は、バタヴィアの総督からも承認された。[46]

松平定信は第一次ロシア使節ラクスマンを礼をもって遇したが、この度の大使レザノフの扱いは、全く礼を欠い

たものだった。この結果、ロシア船がカラフトを襲撃し、一八〇七年にはロシア船打ち払い令が出されたことは、周知の事実である。

一八〇七年、オランダ商館長は、ロシアの皇帝が日本に宣戦を布告したのかどうか、ひそかに調べてほしいと依頼されたが、バタヴィアからは、この調査は次の機会に応ずることにする、との回答しか来なかった。(47)

この調査の結果は、一八一八年八月一〇日になってようやく商館長コック・ブロムホフから長崎奉行筒井和泉守に手渡された。ここには、「ロシア人が日本の北岸で行なった権利侵害は、ロシア皇帝の命令によるのか、あるいは島民自身の兵力でおこなわれたのか、ロシアでひそかに調査してほしいと将軍に命令された。オランダでの噂では、この権利侵害はロシア皇帝の命令によるのではなく、船長の誤解により起こったものである。これがオランダから我々の上司に到着した回答である。」とあった。(48)

幕府はオランダからの情報を待つのではなく、進んで調査を依頼するようになったのである。

むすびにかえて

一八二七年（文政一〇）、商館長メイランは次のように記している。「日本の文化人が抱いている芸術、学問への知識欲、渇望、感受性は、この四、五〇年間、オランダ人により書物や器具を通じて満たされていたが、これは想像を越えるほどに達している。芸術学問の進歩を他の東洋諸国と比較してみると、中国でさえこれには及ばない。日本人はオランダ船がもたらす大羅紗その他の必需品の欠乏を、自ら慰めることも出来るが、学問への情熱は彼ら

にとって欠くことが出来ないと断言できる。彼らはこれなしにいられないし、これを通じてヨーロッパのどこかの国と常に交渉を保ちたいと、抗しがたいほどの力をもって駆り立てられている。オランダ人が立ち去ればイギリス人、ロシア人を相手にするだろう。現在この二つの国は彼らにもっとも恐れられているが、オランダ人は時宜を得た情報を与えることにより、これらの国の攻撃にたいして彼らを守ってくれると考えられ、オランダ人を彼らの国につなぎとめておくことは、将軍が大きな犠牲をはらうに値すると考えられている。(49)」

このメイランの記述は、もとは東インド総督の依頼をうけてメイランが日本貿易について行った調査の報告書にある。この報告書はメイランが商館長として長崎に赴任した年に総督に提出されたが、大変よくできていたので、一八三三年には『日本貿易史』と題して、『バタヴィア協会紀要』一四輯として出版された。

日本がヨーロッパの学問・芸術に追いついていくために、オランダからの書物、器具の輸入を必要としていること、イギリス、ロシアの攻撃にたいし日本を守るために、オランダ人から時宜を得た情報を得ることは、日本にとって不可欠であることを、オランダもよく承知していたのである。メイランの『日本貿易史』の最終章にこのような記述があることは、二〇〇年にわたるオランダ人と日本の関係が、商業から文化へと完全に移行したことを示すに他ならない。

レザノフ来航の際のドゥーフの働きは、それまでオランダ人が日本の知識人の間に築いてきた信頼に応えるものだった。ドゥーフは、通訳、翻訳に当たって正確を期し、決して元の意味を曲げることはなかった。長崎の通詞も、江戸の奥医師も、わかりやすいオランダ語で書かれてさえいれば、それをチェックできるほど、オランダ語が上達

していた。幕末に国際関係の緊張が高まる前に、日本人のオランダ語の読み書きが一定の水準に達していたことの恩恵ははかりしれない。それと共に先にあげたゼオガラヒー、ベシケレイヒング・ハン・リュスランドの翻訳も何種類が刊行された。またこれらの本が当時の地理書、外国事情書に引用された例はさらに多い。北門からの挑戦は、オランダ語学力の急速な進歩と、世界情勢の理解に大いに寄与したと言える。

〔付記〕本稿は、平成七年度文部省科学研究費基盤研究（B）による研究の一部である。

註

（1）田保橋潔『増訂近代日本外国関係史』刀江書院、一九四三年。三一～五九頁。同「十七八世紀に亙れる露国の太平洋発展と対日関係」（下）『歴史地理』四三―六。

（2）Blussé, J. L. & Remmelink, W. G. J.(eds.), *The Deshima Diaries. Marginalia 1700―1740.* The Japan-Netherlands Institute, Tokyo, 1992. p.492 ff. 162 ―168. 近藤守重「邊要分界図考」巻之七、『近藤正齋全集』第一、一三九～一四〇頁。

（3）拙稿「十七世紀後半の情報と通詞」『史学』六〇―四。

（4）鮎澤信太郎『鎖国時代の世界地理学』日大堂書店、一九四三年。一～二三頁。

（5）村上直次郎訳『長崎オランダ商館の日記』第三輯。岩波書店、一九五八年。二五二～二五三頁。

（6）Dagregister van de Factorij Nagasakij, 27 October 1783 - 26 November 1784. Ms. ARA. NFJ. 195.

（7）法政蘭学研究会編『和蘭風説書集成』上巻。日蘭学会、一九七六年。三〇六頁。

（8）石山洋「大地理師ヒュブネルをめぐって」『上野図書館紀要』第三号。岩崎克己「ゼオガラヒーの渡来とその影響」『書物展望』一〇―一二。

（9）蘭訳本もいくつも版を重ねているが、国会図書館に架蔵されるものは、その第五刷 *Kort Begryp der oude en nieuwe Geographie.* Utrecht, 1736. である。

（10）Eisch van koopmanschappen. Ms. ARA. NFJ.

1368.

(11) Facturen. 1746 - 1769. Ms. ARA. NFJ. 796.

(12) 註(8)および(9)参照。

(13) 鮎澤信太郎「洋書から邦訳された世界地理書」開国百年記念文化事業会編『鎖国時代日本人の海外知識』乾元社、一九五三年、所収。八五頁。

(14) 大槻玄澤「蘭学階梯」沼田次郎・松村明・佐藤昌介編『日本思想史大系・洋学上』岩波書店、一九七六年所収、三三五頁。

(15) Eisch van koopmanschappen. Ms. ARA. NFJ. 1361, 1367. Ingekomen Brieven 1759. Ms. ARA. NFJ. 380.

(16) 「蘭学階梯」三六〇頁。岩崎克己『前野蘭化1』平凡社、一九九六年。二八〇～二八一頁。

(17) Extract uit de patriasche generale missive geschreven door de Edele Hoog agtbare Heeren gecommitteerde bewindhebberen van de Generale Nederlandshe Compagnie ter vergadering van 17en aan Hun Hoog Edelen den Gouverneur Generaal en de raden van Indië, gedateerd in Middelburg, 18 November 1784. Ms. ARA. NFJ. 499.

(18) Lequin, Frank, (ed.); *The Private Correspondence of Isaac Titsingh*. J. C. Gieben, Amsterdam, vol.1, pp. 101-106.

(19) 沼田次郎『洋学』吉川弘文館、一九八九年。八五～八六頁。

(20) Lequin, Frank, (ed.); *ibid.* vol.2, p.557.

(21) loc. cit.

(22) 水口志計夫・沼田次郎編訳『ベニョフスキー航海記』平凡社、一九七〇年、は航海記だけでなく、寄港した日本各地の史料、その伝聞に関する史料、オランダの史料の翻訳を採録し、さらに解説、文献目録を付したもので、この事件についてこれにまさる史料集はない。

(23) 水口・沼田前掲書、三三〇～三三一頁。

(24) 水口・沼田前掲書、二三六～二三七頁。

(25) 佐藤昌介『洋学史の研究』中央公論社、一九八〇年。一二〇～一三〇頁。なおベシケレイヒング・ハン・リュスランドとは、通詞や蘭学者のあいだの通称で、その原本は Oude en nieuwe staat van't Russische of Moskovische Keizerryk, behelzende eene uitvoerige historie van Rusland en deszelfs groot-vorsten（下略）という大変長い題であることは、岩崎克己「ベシケレイヒング・ハン・リュスランドの流傳と翻訳」（一）（二）『書物展望』一一の一一、一二にくわしく考証されている。

(26) 田保橋前掲書、一三三～一三五頁。『蝦夷拾遺』と『蝦夷草紙』はともに大友喜作編『北門叢書』第一冊、北光書房、一九四三年、に収録されている。
(27) 『和蘭風説書集成』下巻、四一～四六頁。
(28) 『和蘭風説書集成』下巻、五五頁。
(29) Dagregister van de Factorij Nagasakij. 1 November - 13 November 1792. Ms. ARA. NFJ. 203. 時事解説辞典とは、ヒュブネルの編纂した辞典の蘭訳版で、いくつも版を重ねているが、蕃書調所の印のある国会図書館本は、Hübner, Johan, *De nieuwe, vermeerde en verbeterde kouranten-tolk, of zakelyk, historisch en staathundig woordenboek*. Leiden, 1748. である。一八世紀に入って新聞が発行され、読者の層がひろがると、これを読むために教養のある人も、ない人も小項目辞典を必要としたので、この本も各国語に翻訳された。日本でもこの頃からもっとも広く利用された本の一つである。石山前掲論文参照。
(30) Dagregister van de Factorij Nagasakij. 1 November 1791 - 13 November 1792. Ms. ARA. NFJ. 203. 外来語辞典とは、Meyer, Lodewijk, *Woordenschat*. (語彙宝函) の第一巻 *Bastaard-woorden* である。
(31) 藤田覚『松平定信』中公新書、一九九三年。一七二～一八二頁。
(32) 亀井高孝・村山七郎編『北槎聞略』吉川弘文館、一九六五年。
(33) Dagregister van de Factorij Nagasakij. 13 November 1792 - 6 November 1793. Ms. ARA. NFJ. 204.
(34) Dagregister van de Factorij Nagasakij. 7 November 1793 - 14 November 1794. Ms. ARA. NFJ. 205.
(35) Dagregister van de Factorij Nagasakij. 20, 25 Maart & 4 April 1794. Ms. ARA. NFJ. 205.
(36) 『大日本近世史料・近藤重蔵蝦夷地関係史料一』東京大学史料編纂所、一九八四年。一～二頁。
(37) ヘンドリック・ドゥーフ・ユニアの秘密日記。日蘭交渉史研究会訳『長崎オランダ商館日記』四、雄松堂出版、一九九二年。一一七～一七八頁所収。
(38) 日蘭交渉史研究会訳『長崎オランダ商館日記』二、三二～三四頁。
(39) Missive van Johannes Siberg aan Hendrik Doeff, 5 Junij 1804. Ms. ARA. NFJ. 430.
(40) りの三通の書簡は、Veenhoven, Willem Adriaan, *Strijd om Deshima, Een onderzoek naar de*

aanslagen van Amerikaanse, Engelse en Russische zijde op het Nederlandse handelsmonopolie in Japan gedurende de periode 1800-1817. (Proefschrift ter verkrijging van den graad van Doctor in de letteren wijsbegeerte aan de Rijksuniversiteit te Leiden, 1950) Bijlage 1, 2, 3 (pp.I-III) に収められている。

(41) 一八〇三年、以前長崎に来航したことのある、アメリカ人ウィリアム・ロバート・スチュワートが、ナガサキ号の船長として、ヨーロッパ人一〇人、黒人二人を乗せて、個人的に貿易を行うため、アメリカから来たと偽って入港した。しかし、この時入港していたレベッカ号の船長が、この船はカルカッタから来たものであると証言したため、取引を許されず出帆した。その直後、イギリス船フレデリック号がベンガルのカルカッタから入港し、船長ジェームス・トリーは自分の勘定で、自分の危険負担で来たと言った。商館長ワルデナールは検使とともに、船長の尋問に立ち会った。この問答で通詞たちは船長がベンガルとかカルカッタ、イギリスなどと言った地名は通訳せず、イギリス人という代わりにフランス人と訳していた。ワルデナールは、「検使たちは、イギリスとかフランスとかいう地名を私自身と同様によく聞き取っているが、しかし、彼らはきっと慈悲深く、それをわかろうとしなかったと思う」と書いている。結局この船も通詞と検使のはからいにより、「ベンガルというオランダの領土もあるが、通商を許されていない地域からの船」として、混乱なしに退去させられた。（ウィリアム・ワルデナールの秘密日記。『長崎オランダ商館日記』四、四九～一一三頁所収。

(42) ラクスマンに与えた回答で、松平定信は「国法」として外交関係のない国の船の来航を禁止していると述べたが、レザノフへの回答ではこの「国法」が、現在外交関係のある国以外と新規の関係を持つことは「祖法」により禁止されている、として国法が祖法に高められたことは、藤田前掲書、一八五～一九五頁に明快に分析されている。

(43) Aangekomen secrete missive de Factorij Nagasakij. Ms. ARA. NFJ. 586.

(44) Memorie voor Heer de Sturler door Jan Cock Blomhoff, 20 November 1823. Ms. ARA. Ministerie van Koloniën 3214.

(45) Aangekomen secrete missive de Factorij Nagasakij. Ms. ARA. NFJ. 586.

(46) Secrete missive van Siberg aan Hendrik Doeff, 11 Junij 1805. Ms. ARA. NFJ. 586.

(47) Den Kommandeur van de Koninklijke Order

van Holland en Directeur Generaal van zijne Majesteits Finantien en Domeinen in Azien, Wouter Hendrik van Ysseldijk aan afgaande en aankomende opperhoofden Hendrik Doeff en Hendrik Filenius Kruijthoff. Batavia, 16 Junij 1809. Ms. ARA. NFJ. 435.

(48) Afgegane Stukken 1818. Bijlage 6. Ms. ARA. NFJ. 546.

(49) Meijlan, G. F., *Geschiedkundig Overzicht van den Handel der Europezen op Japan.* (Verhandelingen Bataviaasch Genootschap 14. 1833) pp.311-312.